

都市鳥研究会の活動と日本鳥学会

唐沢孝一（都市鳥研究会）

(1) 発足の経緯と時代背景

都市鳥研究会は「都市環境に生息する野生鳥類の生態の解明」を目的に 1982 年 4 月に発足した。戦後、日本の高度経済成長を経て 1970～80 年代に東京・大阪などの都市は一段と巨大化し、日本列島全域で都市化・工業化が進行した。こうした時代背景の中で新たに都市環境に進出する鳥類の出現が目されるようになった。

会の発足以前に都市鳥の調査・研究は各人がそれぞれに取り組んでいた。例えば、カラスやムクドリの集団時（黒田長久）、東京の鳥類相の変遷・ヒヨドリの越冬（川内博）、ムクドリの集団時・ヒヨドリの食性（越川重治）、銀座のツバメの繁殖・都心からのカワセミの後退（金子凱彦）、上野不忍池のカワウのコロニー・カモ類の越冬生態（福田道雄）、帰化鳥の生態（成末雅彦）、都市鳥の東京下町への進出・果実食鳥の種子散布と都市林形成（唐沢孝一）などである。本会は顧問（黒田長久）、代表（唐沢孝一）、事務局長（川内博）、編集（越川重治）、幹事（金子凱彦・山根茂夫・滝之入新一）等で発足し、中核のメンバーは当時の日本鳥学会の会頭・幹事・会員であり、学会の活動を通して出会いがあったともいえる。2001 年までは主に唐沢の勤務先（都立両国高校、後に都立城東高校）を拠点に活動した。

(2) 主な活動

会員の大半は、教師、公務員、サラリーマン、OL、主婦、学生などであり、研究としてはアマチュア集団である。本務としての職業を持ちながら、限られた時間をさいて都市鳥の観察・調査を行ってきた。そのための研究の限界はあるものの、他方では大勢の会員やマスコミ等の協力を通して市民参加型の情報収集を行うことができた。また、情報収集の手段として、「調査カード」（調査者・観察場所・年月日・都市鳥名・観察事項などを印刷したカード）を用いて、都市鳥の食性、時、繁殖、人との関係など、都市ならではの生態に注目して情報収集を行った。PC やネット網を利用できる今日からみれば、如何にもアナログ的・前近代に見えるが、東京駅構内などの人工構造物で繁殖するキジバト、都心の駅や駐車場などで繁殖するツバメの営巣環境、生ゴミをあさるハシブトガ

ラス、ヒヨドリの食性の幅や変化など、貴重な都市鳥情報を入手することができた。

都市鳥研究会が大きな飛躍と転機を迎えたのは、「トヨタ財団第 3 回研究コンクール」（1984 年 3～86 年 10 月）への応募と研究奨励特別賞の受賞が挙げられる。約 2 年半に及ぶ「東京駅・皇居周辺における都市環境下に生息する野生鳥類の生態研究」を通して、会員組織が整い、研究内容を絞り込むことが出来た。また、全国各地で活躍している日本鳥学会会員の協力を得て、全国主要 41 都市の都市鳥調査を実施した。またロンドンの都市鳥調査を行い東京との比較を試みた。さらに研究の守備範囲を拡大し、単に鳥類の生態学的な研究に留まらず、都会人の生活様式や都市構造の変化、あるいは都市文明をも視野にいれることとなった。

調査や収集した都市鳥に関するデータは、会報「URBAN BIRDS」（1984 年 4 月創刊～2010 年 12 月現在 通巻 68 号を発行）に記載し、記録に留めた。また、2001 年より「都市鳥ニュース」（年 1 回発行、2010 年に No. 10）を発行。普及活動として「都市鳥の絵はがき」を発行した。

会としての調査は、1985 年より 5 年ごとに「東京都心部におけるツバメの繁殖」および「東京都心のカラスの個体数変動」の二つのテーマで実施している。25 年に及ぶ都心のツバメの営巣地や営巣数、あるいはカラスの生息数などの調査は、日本経済の動向や都市再開発や都会人の生活様式などその時代を反映しており興味深いデータを積み重ねている。

鳥学会との関係では、二つのシンポジウムが挙



日本鳥学会大会「都市鳥のシンポジウム」（東邦大学・1986）。

げられる。一つは1986年大会（東邦大学）の「都市環境に生息する鳥類の生態」、もう一つは鳥学会後援による「都会の鳥たちの夜」（立教大学1990）である。前者は内田康夫・川内博・杉森文夫が話題提供し、鳥類が都市進出をした原因、都市に於ける人と鳥の共存などが討議された。鳥類にとっての代替え環境として都市（内田康夫）、人を恐れなくなった鳥（森岡弘之）、未開拓の都市環境への新たな適応現象としての都市鳥（平川浩文）、新たな鳥類群集の形成過程としての都市鳥（中村登流）など、都市鳥への興味と認識を深めた。また、後者では、唐沢孝一・中村一恵・越川重治・大庭健二が話題提供し、都市鳥の時の機能や構造、重要性等について論議した。

（3）今後の展望

都市鳥研究会は1982年に発足以来約30年、都市に於ける鳥類相の変化、生態・習性の特性、人

との共存や対立、あるいは都心のカラスやツバメの個体数変動などをモニタリングするなどしてきた。都市化・人工環境化、あるいは都市再開発などは、今後も地球規模で進行する問題であり、時代と共に絶えず変化していく都市環境に鳥類がどのように適応し、人との折り合いをつけていくのかは、鳥類研究者だけでなく都会人にとって興味あるテーマである。本研究会は創立30年の2012年より代表を唐沢孝一から川内博に交代し、新体制のもとで再スタートすることになった。ホームページ（<http://urbanbirds.eco.coocan.jp/>）を立ち上げ、国内外の最新都市鳥情報の収集にも取り組んでいる。都市鳥の生態に関心のある鳥学会会員の参加を期待しているところである。また、今後も可能なかぎり都市鳥情報を集め、調査を継続し、後世の都市鳥研究のために記録を積み重ね、活動の輪を次の世代に引き継ぎたいと思う。